

小豆島における移住の現状と今後の課題

荒木 裕佳, 高嶋 亜紀

[指導教員: 武庫川女子大学准教授 水野 優子]

キーワード: 移住, コミュニティ, 暮らし

1. 研究の背景

近年, 日本の総人口は2015年に1億2709万4745人であったが, 2010年の前回の国勢調査から96万2607人減り, 1920年の調査以来の初めての減少となった。今後も減少は続いていくと考えられ, 減少を前提に成長する方法を考えていく必要がある。2014年に閣議決定された「まち・ひと・しごと創生総合戦略」において「地方移住の推進」が掲げられており, 地方移住が重要課題であると明示されている。しかし, 移住するとなると, 仕事, 住まい, 人間関係, 環境など全てが変わってしまうことから, 理想と現実のギャップが大きく, 踏み出せないことが多いのが現状である。調査対象地である小豆島土庄町では, 「移住, 定住人口の増加」を目指し, 2007年より移住促進に対する取り組みをおこなっている。その結果, 移住者は年々増加している。しかし, 移住しても2, 3年で元の土地に帰ってしまったたり, 別の土地へ移ってしまったりする移住者が多く, 何に不安, 不満があり去ってしまうのかわかっておらず, 定住にはつながっていないことが現状にある。今後どのような制度や環境があれば長く暮らしていけるのかということが課題になっている。

2. 本研究の目的

移住促進施策事業を積極的に進める小豆島土庄町を事例に, これから減りつつある島の人口減少を抑え, 移住者を増やし長く暮らしていくために, 今ある環境からまた違った環境である島に移住する人々はどのような考えで, どのような目的をもって移住を決断しているのか, またどのような制度を利用したのか, 移住の満足度, 不満点などに着目し, 移住した人, 移住を支援する人の様々な立場からの考えや意見をもとにより良い移住支援施策を検討する。そして, これから小豆島に移住してくる人に長く定住していく人を支援していくための施策に役立てることを目的とする。

3. 研究方法

3-1 調査対象地

小豆島は, 瀬戸内海の東部に位置している。瀬戸内海では, 淡路島に次いで2番目の大きさを有する。小豆島は船でしか渡れない離島であるが, 1日に発着するフェリーの本数は約80便もあり, 日本有数の数を誇っている。小豆島は, 小豆島町と土庄町から成り立っている。両町の2017年4月時点での人口は, 28,033人となっている。



図1 位置図

3-2 調査概要

土庄町に移住された方の移住前後の生活や情報を収集し, 分析することを目的とし, アンケート調査とヒアリング調査をおこなった(表1, 2, 3)。

表1 アンケート調査概要

対象	2013年4月1日以降に土庄町に転入し, 現在も在住の方
方法	郵送配布, 郵送回収
票数	配布数833 回収数222 回収率26.7%
質問	移住したきっかけ, 生活の変化, 満足点, 不満点, 今後等
期間	2018年9月6日～2018年11月1日

表2 ヒアリング(移住者)調査概要

対象	小豆島に移住された方
方法	インタビュー形式
人数	14名
質問	きっかけ, 住まい, 仕事, コミュニティ, 今後
期間	2018年7月21日, 8月25日, 9月17日, 9月18日, 11月2日

表3 ヒアリング(移住支援側)調査概要

対象	土庄町企画課, NPO法人Totie
方法	インタビュー形式
人数	2名
質問	移住支援のあり方, 移住者が希望していること, 今後等
期間	2018年8月27日, 12月17日

4. 結果および考察

4-1 アンケート調査結果及び考察

回収数222名のうち, 年齢別でみると, どの年代からも回答を得ることができた。20歳代から50歳代の若年層の割合は約6割を占めていた。

移住して良かったかどうかの回答では, 全体でみると, 良かった, どちらかといえば良かったの「良かった」と回答した人は64.4%, どちらかといえば良くなかった, 良くなかったの「良くなかった」と回答した人は7.7%となっていた。

特に, I, Jターンの移住者が良かったと回答している割合が若年層では70.8%, 高齢層では84.3%と高くなっている。移住して良かった層が良くなかった層を上回っていたが, Uターン若年層の「良かった」と回答した割合が33.3%と他のタイプと比べて低くなっていた。しかし, 「どちらともいえない」という回答も約2割あり, いかにこの層の流出を防ぐかを考えていく必要がある。

また、移住して良くなかった層と良かった層で不満点の比較をおこなった。どの層でも、暮らし関係に不満を抱えている人が多いことがわかった。特に、交通利便に不満を抱えている人が多い。また、医療、福祉に不満を抱えていることがわかった。

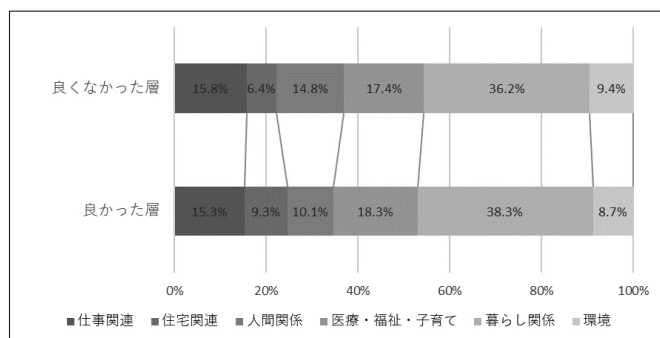


図2 不満点

これからも住み続けるかどうかの回答では、「住み続ける」という回答が約 6 割あった。居住年代別でみると、年数が経つにつれて「住み続ける」と答えた回答が増えていった。しかし、「わからない」という回答も年数が経つにつれて増えていた。

土庄町で住み続ける方は住環境や自然に惹かれ生活に満足している人が多数と考えられる。しかし、現状に満足していても、人間関係や生活環境の変化を拒む人や将来何が起こるかわからないという回答も多く、定住するかどうかの理由に大きく影響しているとわかった。

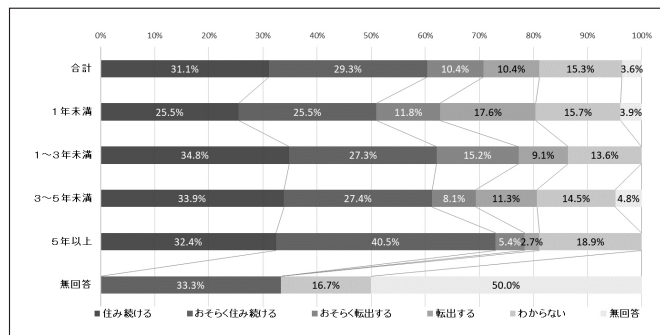


図3 これからも住み続けるかどうか

4-2 ヒアリング調査結果及び考察

全体を通して移住したきっかけは単身者、夫婦に関わらず、しっかりと他の地も検討した上で土庄町を選んだ方が大半を占めていた。

生活について土庄町に移住した後は移住者によって状況は様々だが、大変だと感じ以前住んでいた場所との生活価値観や金銭面、島内の方とのコミュニティの違いにギャップを感じている方と「自然がきれい」「利便性がいい」と思った方とで意見が二極化していた。住まい探しについて土庄町の移住施策としてある空き家バンク制度の移住者利用状況から見て実際に空き家バンクを利用した人は 2 割にも満たず、空き家バンクをみて検討したが利用しなかった人は 4 割だった。移住や将来の考えでは全体を通して土庄町でしかできない暮

らしを求めて行動する方が移住や定住する上で向いているといった島民の方の意見も少なくない。このように移住するという決断に至った行動や考え、生活する上での価値観の違いに合った施策が必要だと言える。

移住者はたくさんの想いや現状の変化に合わせ、なるべく環境に馴染もうとしていることが分かった。場所も人も風習も違う地に行くという事は本当に大変で慣れるのにも時間がかかり不満や心配事が後を絶えない。その反面、移住者は小豆島土庄町でしかできない自然や産業に密接した離島での暮らし、職業、ライフスタイルに魅力を感じたことが移り住もうと決心した原動力になっていると推測される。地域の住民の方も移住者の方の受け入れ体制が若年層・年配層に限らずあり、共に気持ちよく生活できる暮らしのかたちがあると分かった。移住支援策としてどんな方でも移住した時に不安や心配なく地域の方と信頼関係を作っていける環境が必要なのではと考える。

5. 結論および今後の課題

本論では主にアンケート調査とヒアリング調査より、土庄町の移住施策は移住促進に役立っており、特に 1～5 年前に移住した移住者は、多様な目的ではあるが移住促進施策を利用していることがわかった。移住施策を提案し、土庄町特有の魅力や心から受け入れて考える移住者が増えるように移住ツアーやターゲットを絞ったイベントなどを行う必要があるのではないかと考える。

住民同士が土庄町の特有の良さや風習を伝えあえる関係があると自然発生的に人々が不安や心配なく安心してかつ充実した生活環境が構築されていくのではと感じた。また、人間関係の構築が移住に関わらず移住から定住へつながるカギとなっていることがわかった。

今後は、移住支援の制度や情報をもっと多くの人に周知していくが必要になってくる。制度は知っていても使い方がわからない、どういう風に利用したら良いのかわからないなどを防ぐ必要があるのではないかと考えた。

また、移住者の求めていること、さらに受け入れる側の地域の方が求めていることとのミスマッチを少なくし、両者にとって暮らしやすい環境を整えていく必要がある。そのため、受け入れる側の地域の方の意見も取り入れ、地域ごとにどういう人材が求められているのかを明らかにしていく必要があるため、地域の方々のお話も伺いたいと考えている。

参考文献

- ・平成 27 年国勢調査,
<https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/index.html>
(2018/12/10)
- ・まち・ひと・しごと創生総合戦略,
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/mahishi_index.html
(2018/12/10)